

平成 2 6 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：3 2 6 7 7

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：2 4 6 5 3 1 2 7

研究課題名（和文）聞き取りによる被爆1世と2世の生活史研究：3．1 1 原発問題下の子育て世代への示唆

研究課題名（英文）Study for a Meaning to Atomic Bomb Survivors' life histories standpoint from their relationship with offspring generation

研究代表者

徳久 美生子（Tokuhisa, Mioko）

武蔵大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：8 0 6 2 5 6 6 6

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000 円、（間接経費） 360,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、被爆1世の戦後経験を、被爆2世との関係という視点から問い直し、3.11以降の子育て世代へとつながる共感の回路を探究することにある。

被爆1世2世を対象にしたインタビュー調査と参与観察により、死者とともに前向きに現在を生きる「被爆者像」が明らかになった。また被爆1世の戦後経験がもつ多様な共感の可能性という現在的な意味を提示した。さらに子育て世代への共感の回路の探究には、まず断絶を認識する必要があることを示した。

研究成果の概要（英文）：This study is consideration about what kind of meaning atomic bomb survivors' life histories have, after nuclear accident in Japan. It is analysis from standpoint of their relationship with offspring generation.

A new perspective for atomic bomb survivors became clear through interviews with them. They have lived with atomic bomb victims positively. And their lives afterwards hold diverse views for the future generations. Because they have lived various lives and they have different ideas for atomic bomb. It became clear from interviews with offspring generation. But there is a break between atomic bomb survivors and future generations, if they face the same problem resulting from effect of radiation.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：被爆1世の戦後経験 被爆1世と被爆2世との関 ライフヒストリー研究 現在を生き抜く被爆者像

1. 研究開始当初の背景

2011 年の本研究開始当初「被爆者」研究は、「直接的な被爆経験や被爆者に対する社会調査から次第に間接的な二次資料やマス・メディアによる報道、メディア分析などに移行」(有末 2013: 11)していた。この変化の背景には、「被爆体験をめぐる意味づけや表象の『陳腐化』『風化』といった」(小倉 2013: 225)問題があり、そこにはステレオタイプ化して語られる「被爆体験」は、研究対象としての意味を喪失しているという研究者側の価値判断が働いていた。

だが被爆前の年月より遥かに長い 70 年近い時間を生き抜いた被爆 1 世たちの戦後経験はこれまで十分に検討されてこなかった。

2011 年は、福島第 1 原子力発電所の事故があり、放射能の影響とどのように向き合うのかが問われてもいた。放射能の影響と向き合いながら生き抜いてきた被爆 1 世たちの戦後経験を被爆 2 世という次世代との関係から検討する研究には意義があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、被爆 1 世の戦後経験を被爆 2 世との関係という視点から問い直し、3.11 以降の子育て世代へとつながる共感の回路を探究することにある。

具体的には第 1 に「被爆 1 世」(公の場で被爆体験を証言していない複数の被爆 1 世を含む)に戦後経験を中心にした聞き取り調査を実施することで、新しい被爆者像を提示し、第 2 に、被爆 1 世の戦後経験を被爆 2 世(子ども世代)の視点から分析し、その現在の意義を明らかにした上で、第 3 に被爆 2 世から放射能汚染への不安と対峙する現在の子育て世代へとつながる、被爆経験を未来へと活かす新たな道筋を探究する。

3. 研究の方法

(1) 被爆 1 世を対象にした聞き取り調査を実施し、現在を生きる新しい「被爆者像」を提示する。

(2) 被爆 2 世を対象に、親世代との関係を中心にした聞き取り調査を実施し、被爆 2 世の視点を参考に「被爆 1 世」の戦後経験がもつ現在の意味を提示する。

(3) 放射能の影響と向き合う福島の現状をインタビューと参与観察によって調査し、被爆経験を未来へと活かす新たな道筋を示す。

4. 研究成果

(1) 調査の実施状況

研究期間中、広島において 13 回(研究期間外を含めると 15 回となる)、長崎、福島ではそれぞれ 1 回、被爆 1 世、2 世を対象にしたインタビュー調査と参与観察を実施した。

また東京都内において被爆 2 世からの聞き取り調査を行った。

合計 15 名の被爆 1 世と 4 名の被爆 2 世に

インタビューを実施した。

インタビューした 15 名の被爆 1 世のうち広島市在住の 10 名、そして広島市と東京都内に在住の 2 名の被爆 2 世には、長時間、継続してインタビューしている。10 名の被爆 1 世の内 7 名は、同じ国民学校の同級生である。彼女たちは、被爆時に最も多くの同級生を亡くした当時中学 1 年の学年であった。2012 年 4 月から年 2 回開かれる彼女たちの個人的な同窓会に同席している。調査を開始した当初は、全員が公的な場で被爆体験を話したことがなかった(その後、手記を書いたことのある 1 名が限定的ではあるが証言活動をはじめた)。最初に被爆体験をまとめて聞いたが、生活の変化、日常の細々とした話題、社会問題など様々な話が聞ける。被爆体験とその後の出来事も話題になる。

また広島、長崎で開催されたセミナー、広島の NPO が主催する海外研修生の受入プログラムを参与観察し、被爆 1 世の戦後経験から次世代への共感の回路を考える上での参考にした。

さらに福島県の沿岸部の視察に参加し、原発事故の影響が残る避難解除区域の現状を観察するとともに、現地で生きる人たちの話を聞いた。

(2) 調査による研究成果

現在を生きる「被爆者像」の提示:これまで公的な場で証言をしたことのない「被爆 1 世」とのインタビューをもとに、死者とともに前向きに生きる彼/彼女たちの生き様と独自の抵抗の論理を、被爆 1 世たち自身の言葉によって明らかにした。

インタビューした被爆 1 世たちは、原爆という兵器、周囲の大人からの心ない言葉、そして生き残ったうしろめたさに苛まれる自分自身によって 3 重に「生」を否定された経験を持つ。3 重に生を否定された彼/彼女たちはいかにして戦後を生き抜いたのかを分析した。

彼/彼女たちは、死者たちとともに戦後の時間を生き抜いていた。そして原爆で亡くした友人たち、家族、親族といった身近な死者たちを忘れずともに生きることが、彼/彼女らの生を支えていた。

死者たちだけが、3 重の意味で生を否定された彼/彼女たちの生を承認できるからだ。彼/彼女たちにとって、死者たちは、絶対的な存在であり、自らの苦難は常に死者たちの苦難に比べて低く位置づけられる。彼/彼女たちにとっては、「死んでしまったもんが一番かわいそう」なのである。だからこそ「感謝して生きること」が、彼/彼女たちの課題となつて前向きな生を支えている。

他方で原爆によって生を否定された経験をもつ被爆 1 世たちにとっては、死者とともに「生き抜くこと」それ自体が、生を否定したのに対するひとつの抵抗となる。ただし生きていることの後ろめたさは続いており、彼/彼女たちの生を否定せざるをえないの

は、自分たち自身でもある。したがってこの抵抗はアンビバレントなものとなる。複数の方が「被害者意識をもって話したくない」と述べたが、その言葉の背景には、自分自身に対する抵抗がある。自らの苦難を語ることに死者たちの側（語らない存在）に自分自身を位置づけるため、彼／彼女たちは沈黙する。

独自の抵抗の論理をもち、死者たちとともに生き抜こうとしている被爆1世たちは、これまでの、平和を訴えることで苦難を乗り越えていくステレオタイプ化した「被爆者」像とは異なる人々である。

被爆1世の戦後経験がもつ現在の意味の提示：被爆1世へのインタビューから、被爆体験については、（直爆か入市被爆かに代表される）被爆状況の違い、（火傷や怪我の状況など）身体ダメージの違い、（家族を亡くしたかどうかなど）精神的なダメージの違い、（家が焼失したかどうかなど）生活のダメージの違いといった相違があった。たとえ同じような被爆状況であっても、自身の被爆体験に対する考え方は異なってもいた。

さらに放影研の検診にいくかどうか、原発問題をどう考えるかといった原爆に関わる出来事についても、異なる意見があった。実際に、それぞれの考え方の相違が明らかになった場に居合わせたこともあった。だが、参与観察の現場では、話し合いが行われてコンフリクトが克服されることはなかった。お互いの考え方の違いは、そのまま保留されていた。意見がかみ合うまで議論をすることもなかった。喧嘩にもならなかった。

さらに、「被爆者」ではない人々との間にもコンフリクトがあったと聞いた。特に医療費などの公的な支援をうけていることが、「被爆者」ではない人々とのコンフリクトにつながったという。医療補償をめぐる酷い言葉をぶつけられた話もきいた。しかしながら、どのように酷い言葉をぶつけられても、彼／彼女たちはほとんど反論しなかったと聞いた。インタビューした被爆1世たちは、他者たちとの考え方の相違をポジティブにあきらめて、コンフリクトと共存していた。

他方で被爆2世へのインタビューからは、被爆2世たちが、親世代をとりまくコンフリクトを目撃していたことがわかった。だがコンフリクトを目撃してはいても、親世代の精神的なダメージからの影響については、個人差があった。被爆2世であることを意識した経験が全くないと語る人もいれば、親世代が抱えたトラウマの影響をまともにうけて育った人もいた。

被爆1世の原爆体験、戦後経験そしてその捉え方は多様であり、被爆1世から被爆2世への影響のあり方もまた多様であった。

だが多様であることは、次世代に向けた共感の可能性が複数あるということでもある。少なくともコンフリクトと共存してきた被爆1世たちの生き様は、他者との相違を認め

た上で、他者とともに生きるとはどのようなことなのかを示している。実際には被爆1世たちの「生」を支えていたのは、死者たちだけではなく、ともに生きる他者たちとの人間関係でもあった。

被爆1世たちそれぞれが対峙したコンフリクトとそれとの共存の経験の語りは、「平和」を形而上学的な目的として語られてきたこれまでの「被爆体験」とは異なる、多様な共感の回路のひとつとなりうる。

子育て世代との断絶：3.11以降の子育て世代にとって、放射線の影響は大きな問題関心である。実際に福島でのフィールドワークでは、補償金の違いが人と人とを分断している状況が明らかになった。こういった人と人との分断は、被爆1世が直面したコンフリクトとオーバーラップする。だが被爆1世2世へのインタビューでは、放射線の影響が話題になることが新たなコンフリクトにつながると考える人たちがいた。ある被爆1世は、被爆と「被曝」との間にある差異が見えにくくなることへの懸念を語ってくれた。自分たちがこれまで生きてこられたことを考えれば、騒ぎ過ぎではないかとの意見もあった。この点は、放射能の影響を懸念する子育て世代と、実際に福島で暮らす人々との温度差に通じる部分ではあるが、だからこそ、フクシマとヒロシマを同じレベルで考えるのは難しい。共感の回路を考える上では、まず被爆1世2世たちと現在の子育て世代には、断絶があることを認識し、その断面を問い直す必要がある。（3）研究結果からの示唆

現在10人の被爆1世から継続して話を聞いているが、自身の病気、家族の死などにより、80代を迎えた彼／彼女たちをとりまく状況は大きく変化している。

本研究においては、死者とともに前向きに生きる現在の被爆1世の生き様を明らかにしたが、今後彼／彼女たちが自らをとりまく変化、そしてその先にある自らの死とどのように向き合っていくのか、インタビューを継続していく必要がある。

同席を許されている個人的な同窓会では、体調をくずした出席者からの「ここまで生きられたのだからもういい」という発言に全員が同意した。だが「もういい」という発言が、どのような死との向き合い方となっていくのか、道筋は決して一様ではないだろう。たとえば被爆1世たちにとって最も身近な人間関係が死によって分断されたときのダメージは大きい。インタビューの中でも、母親や配偶者といった身近な死によって生じたダメージを克服することの困難に関わるストーリーが語られた。実際に身近な死がおこしたダメージがどれほど大きいかを考えさせられる出来事にも遭遇した。被爆1世たちの強さ・明るさは、深刻なダメージを克服したがゆえに身に付いたものでもあった。死に対する被爆2世の受けとめ方も多様であろう。ある被爆2世は、60代で亡くなった母親の潔

い死に様が「有り難くもあり、寂しくもあり」であったと話してくれた。

被爆1世の多様な原爆体験、戦後経験、それぞれの考え方の違い、被爆2世への影響の違いをひとつの分析軸にまとめあげることなく、丁寧に分類整理していく必要がある。

他方で、被爆1世たちの「被爆体験」に関する記憶が、完全ではないことも実感している。個人の記憶は、集団の記憶が入り込み再構成される。時間の経過にしたがって変化もする。変化する記憶を次世代がどう継承していくのか。陳腐化・風化を回避して伝えていくことは可能なのか。今後、個人のアイデンティティ論と記憶論をつなぎ合わせながら検討していきたい。

被爆体験、戦後経験の伝承については、大学生を対象にした研修プログラムの提供による実践を計画している。修学旅行などで被爆証言を聞く機会はあるが、被爆1世と直接的に触れ合い、意見を交換する機会はなかなかない。確かな自己アイデンティティの確立が困難な、不確かさが拡大する現在にあって、生を承認されないまま生き抜いてきた被爆1世たちと直接対話をするのが未来を生きる大学生たちにとってひとつの指針となる可能性はある。これまで海外からの研修生を受け入れてきた実績がある広島県 NPO (ant-Hiroshima) に協力してもらい、一方的に話を聞くのではなく、時間をかけて、食事をもとにしながら被爆1世たちと話をする双方向の研修プログラムを提供していきたいと考えている。

解釈の問題もあり、被爆体験、そして戦後経験は、次世代の手で書き換えられる可能性がある。むしろそのまま正確に伝承されるとは考えにくい。だからこそ、被爆1世たちとの会話というひとつの相互行為の実践の過程を通して、共感の回路が構築されていくことに意味があると思われる。時間は限られている。

さらに大きな課題も残っている。インタビューに協力してくれたある男性から投げかけられた「本質的な平和論があってほしい」という要望にも応えなければならない。身に余る課題であるため、まだ具体的には展開していきけないが、戦争対平和という対立軸を設定せず、被爆1世と2世の言葉を丹念に分析する作業を通して、取り組んでいきたいと考えている。

調査を開始した当初は、被爆体験だけでなく、苦労した戦後経験の話も思い出したくないのだと言われたことがあったが、これまで人に語らなかった被爆1世たちが口を開いてくれたのは、自分たちの思いを未来へと託したい気持ちがあつてのことだと考えられる。渡されたバトンは重い。

ひとりの社会学研究者として、被爆1世2世の生活史研究は、研究者側の事情から時間を限定し完了させることができるものではないと考えてもいる。今後も、生き抜いてい

く被爆1世たちの生と向き合い、研究を継続し、被爆1世たちのライフストーリーから、被爆2世、さらには次世代へとつながる共感の回路と分断のあり方を検討していく所存である。

(参考文献)

有末賢 2013「戦後被爆者調査の社会調査史」浜日出夫・有末賢・竹村英樹(編)『被爆者調査を読む』慶應義塾大学出版会 pp.1-34.

小倉康嗣 2013「被爆体験をめぐる調査表現とポジショナリティ」浜日出夫・有末賢・竹村英樹(編)『被爆者調査を読む』慶應義塾大学出版会 pp.207-254

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

徳久美生子 2013「被爆1世の沈黙の意味と抵抗:J.パトラーの自己に関する説明を手がかりに」『年報社会学論集 26号』関東社会学会.

〔学会発表〕(計 3件)

徳久美生子 2012「被爆1世の沈黙と抵抗:戦後経験を中心にしたライフヒストリー調査からの示唆」日本社会学会第85回大会テーマ部会「戦争を社会学する」(札幌学院大学)

徳久美生子 2012「被爆者」の戦後経験と現在・未来:広島市におけるライフヒストリー調査を手がかりに」現象学・社会科学会第30回大会(東洋大学)

徳久美生子 2013 脱構築された自己の帰結に関する一考察:ある被爆証言者の語りを手がかりに」日本社会学会第86回大会(慶應義塾大学)

〔図書〕(計 1件)

徳久美生子 2013「被爆経験の社会学」西原和久・保坂稔(編)『改訂版グローバル化時代の新しい社会学』新泉社.

研究協力者

インタビューに協力して頂いた被爆1世2世の方々

スティーブン・リーパー 前広島平和文化センター理事長

西原和久 成城大学教授

渡部朋子 ant-Hiroshima 代表

黒川都 アイ・モバイル株式会社 シニアリサーチャー